

眉そり言葉通じぬ怖れ

大部屋出身の俳優 土平ドンペイさん(52) 草津市

はい上がる人

わたしの歩跡

稼ぐことだけ考えたら役をしない方が得なんですね。不思議な空間になって、ずっと思っていました。

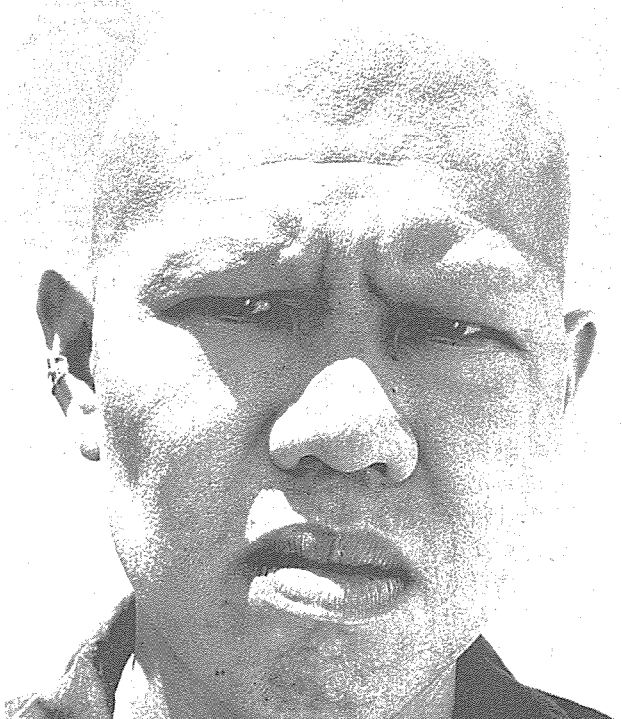
▲松竹京都撮影所(京都市右京区)で大部屋俳優を続けるうち、周囲との熱の差を感じるようになってきた▼

▲「本物の俳優になりたい。いや、なってる」。強い思いがむくむくともたげてきた▼

台本に役名が出てくる「役」というのがあるんです。仕出し(エキストラ)と違って、テロップに名前が出て台本ももらえて。セリフの有無は関係なくて、ギャラも作品ごとに「一本3万円」でなにかになるんです。誰をどの役にするかは、大

「俳優になるんやったら、お金もうけよりも演じてなんぼなんぞ、役をやりたいかった。撮影が始まる前にスタッフルームを最初に訪ね、ドアをたたいて、「大部屋の土平言いますけど、何でもやりますからなんかやらせてください」。そしたら心ある監督は「なんかやらしたれ」。

悪役に活路を見だし、売り込み用に撮影した写真。一度見たら忘れないインパクトがあり、ドンペイさんは「玄關前に貼り出したら売りが来ませんよ」 二いずれも本人提供



ある日、女性社長に呼ばれて「その台本。あなたのものや」。「役やれるんや」。どっから「のぞいてるや吉」というセリフもないワンシーンの役で、遊郭からの足抜けを手助けするんです。この台本は宝物やって思いました。こんな台本がめっちゃくちゃいっばいになるように頑張らなあかんって。カメラの前で活動しないことには、緊張感も味わえないですから、僕は仕出しも役としてとらえています。

悪役に活路、強烈な印象

た。まじめにやっている、連続して出て来たりとか、ちょっといい仕出しがつくんですね。渡辺謙さんの「御家人斬九郎」とか、時代劇の連続ドラマで、悪者のリーダーと自分は東京から来て、さらに下の子分2人は京都の仕出しから入るんですけど、そこには結構入るようになって。

チャンスや。「フニア軍団」

(殺され役や敵役などで知られる故・川谷拓三さんらの俳優集団)は当時いいひんから、俺がやってる。眉毛そるわ、髪の毛そるわ。悪の中に絶対、この顔があるなと思わしたかったんです。悪者の自分には絶対入れてください。かつらもかぶらず丸刈りで時代劇をやって「言葉の通じない怖さがある」って、よく言われました。

初めてつるつるにしたときは、会社で1週間の冬休みに入る寸前です。俳優してるとは内緒だったんで、髪が伸びるか心配でした。仕事始めのとき、社長以下が「つつちゃん、どうしたんや」とびっくりにして。「比叡山の延暦寺に友達がいまして、生きる道を見つけるために



1冊目の台本を手にしたとき誓った通り、今では出演した台本は数百冊に上る

「ついつい引き込まれて」

具体的で、面白いですね! 全く知らない業界なんで、読んでるうちに、ついつい引き込まれてしまいます!!というコメントが寄せられました。

2泊3日で修行させてもらったんです」それは頭もそらんとあかんのか」「気合を入れるために」って出任せを言ってる。顔がね、怖い怖いって言われ、不細工やったんで、ヒーローになる方では絶対ない。メイクさんやスタッフから、キャラクターおもしろいって言われ、これを生かさんと、これを突き詰めなあかんとの一心でした。【エリア編集委員・大澤重人】 二つづく、水曜掲載